



オリジナルから外したパーツ類。ペグ、ビグスビー・トレモロ、ネジなど残らず大切に保管している。

### Gibson Les Paul 1959 (19 2792)

付属のインストラクション・シート。



59年製レス・ポールのオリジナル・ブラウン・ケース。

言わずと知れたビンテージ・エレキ・ギター史上の最高峰、1959レス・ポール。もともとロニー・モン・トローズが所有していたものをオフコースの清水仁 (b) が入手し、1990年代半ばに野村の手に渡った。当時の取引相場は現在の10分の1程度とは言え、それでも車を買えるほどの価格だったはず。多くのギタリストの例に漏れず野村にとっても“完璧なる憧れ”だったが、“触ってみるだけではなく所有する”ことをモットーとする野村としては、本器のオーナーになることはひとつの目標でもあった。“ただ好きというだけで今までギターを弾いてきた僕でも手に入れることができたんだから、1959レス・ポールだって本気を出せば誰でも買える！”という主張は、まさに野村のコレクター道を象徴するものだ。ビグスビー搭載器だが、ビグスビーはブリッジのスタッドに負担をかけるため取り外し、代わりにネジ穴が隠れるサイズのリプレースメント・テイルピース (ロイヤル・テイルピース) を装着。ツマミ部分も当時のペグも代用品に交換して、オリジナルは保管してある。かつてはレコーディングで使ったこともあるが、さすがに近年はほとんど弾くことはない。PUのポビンはダブル・ホワイトで、これまたレア中のレア！



### Gibson Les Paul 1958 (18 1076)

1959年製を手に入れてから約5年後、“1959前後のレス・ポール・スタンダードを揃えてみよう”という壮大な構想のもとに購入した、野村にとって2本目のレス・ポール・スタンダードだ。見事なウェザーチェックと緑青が浮く貴緑の外観で、わりと使い込まれているうえに、入手時点でグローヴァー・ペグに交換されていたプレイヤー・コンディションでもあったため、たびたび現場に持ち込んできた。何と言っても“アンプ直で生きるギター”であり、エフェクターをほとんど使わずギター本来の音を重視するソロ・アルバムや、自身主導のバンドのレコーディングでは時折り用いるが、最近は登場機会が減っている。憧れのCharが1968年製ゴールドトップを使っていたことから、野村の中では“レス・ポールと言えばゴールドトップ”というイメージが根深いそうで、P-90仕様やミニ・ハムバッカー搭載モデルを入手したこともある。しかし、結論としては“僕にはゴールドトップは似合わない！”ということで、今も手元に残っているのは本器だけだ。